

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00028

研究課題名（和文）「真理の多元論」と整合的な形而上学的立場についての研究

研究課題名（英文）Metaphysical worldviews consistent with truth pluralism

研究代表者

井頭 昌彦（IGASHIRA, Masahiko）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：70533321

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究の初期段階では、「世界は物理的なものだけから成り立っている」とする物理主義的一元論の立場についての批判を行った。この成果は国内研究会および国際カンファレンスでの研究報告を経て、2025年度に出版予定の論集に掲載予定である。また、「言説領域ごとに真理を実現する性質は異なりうる」とする真理の多元論の可能性を検討するため、人文学・社会科学の諸分野における研究実態と方法論についての検討を行った。成果は、5件の国内研究会と1件の国際学会での報告を経て、井頭（編著）『質的研究アプローチの再検討：人文・社会科学からEBPsまで』（勁草書房2023）として出版された（筆者は4章100ページ程度を執筆）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は真理という基礎概念について改めて問い直すものであり、特に真理の多元論という立場の可能性が模索されている。一般に、真理といえば世界との対応、つまり《世界を正しく写しとっていること》を意味するものと理解される。しかし、そのような理解は物理学や化学といった自然科学については適切と思われる一方で、倫理学・数学・論理学といった学術領域および一部の社会科学についてはこの考えを維持することが難しい。本研究ではこうした学術領域にも適用可能な真理概念の理解を目指し、研究が実際にどのように進められ何をゴールとしているかという点から、これらの学術領域における《研究の正しさ》を多面的に理解することに貢献した。

研究成果の概要（英文）：In the early stages of the research, a critical examination of the position of physicalist monism, which holds that the world consists only of physical things, was conducted. The results of this work were reported at national and international conferences, and will be published in an anthology to be published in 2025. In addition, an examination of the nature and methodology of research in various fields of the humanities and social sciences was conducted in order to examine the possibility of a pluralistic theory of truth, which states that the property realizing truth can differ from one discourse domain to another. The results were reported at five domestic conferences and one international conference, and published in Igashira (ed.), “Reexamination of Qualitative Research Approaches: From Humanities and Social Sciences to EBPs” (Keiso Shobo 2023), in which the author wrote four chapters and about 100 pages.

研究分野：哲学

キーワード：真理 多元論 形而上学 社会科学 人文学

### 1. 研究開始当初の背景

近年の英米圏真理論における有力な選択肢は、《世界との対応》というアイデアを具体化する何らかの道具立てによって真理を説明する実在論、認識主体の側に何らかの仕方で依存するものとして真理を説明する反実在論、真理はタルスキ的等値図式等に見られる省略的な文法装置でしかないとするデフレ主義、という3つの立場に分類されることが多い。中でも実在論の立場は、分析形而上学領域における truth-maker 理論の精緻化等と連動して、20世紀後半の真理論における主流派を形成している。しかし、21世紀に入って「真理の多元論 truth pluralism」という新たな提案が浮上してきた。きっかけとなったのは *Truth as One and Many* (2009) に代表される M. Lynch の一連の研究であり、その基本的主張は「言説領域ごとに真理を実現(realize)する性質は異なりうる」というものである。たとえば、物理言説で真理を実現する性質は《対応》だが、同じ考えを倫理学言説においてとる必要はなく、世界の側の事実などを要請しないような別の真理実現性質(《妥当性が覆されないこと》など)を想定することが可能である、とされる。この立場は21世紀以降、目覚ましい発展を遂げているが、その一方で、まだ十分に論じられていない側面として、真理の多元論を採用した場合の形而上学的帰結がはっきりしない、という点が挙げられる。実際、《真理》と《形而上学の世界観》という主題同士の関連性の深さは哲学史的観点からみても明らかであろう。こうした点を踏まえると、「多元論」という新規提案に関しても、それが真理についてのある種の理解の提案である以上、そこから導かれる(あるいは少なくともそれが示唆する)形而上学的描像には強い関心が向けられてしかるべきところであるが、実際にはほとんど研究がなされていない、というのが現状である。そして、真理の多元論には、この立場が言説ごとに異なる真理実現性質を認めていることにより、言説を跨いで成立する統一的な形而上学的描像を描くことが困難になる、という側面がたしかにあると言える。

### 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本課題では、現代真理論における多元論の隆盛を背景とした時、「真理の多元論という構想はどのような形而上学的描像を導くのか」という問いを基本線に据えて研究を進めた。また、本課題では、「真理の多元論」と「形而上学的描像」とを結び合わせる作業においてプラグマティズムという思想潮流を補助線とする、という方針を採用した。この構想の有望さと実現可能性の根拠としては、(i) 何が真理実現性質になるかが言説ごとに異なりうるとする多元論構想と、我々の知的活動について《世界の鏡》としての側面よりも《多様な実践的タスクの処理》という側面を強調するプラグマティズムの基本構想との親近性、(ii) 多元論の基盤にある《真理をその実践的機能から特徴づける》という機能主義と、概念を実践的適用から理解するという「プラグマティズムの格率」との類似性、(iii) プラグマティズムから帰結しうる形而上学的描像についての豊富な研究蓄積、といった諸事実を挙げることができる。もちろん、「真理の多元論」はそれ自体としてプラグマティズムと結びつけられるものではなく、両者はひとまず独立の立場と考えられるべきだろう(真理論の文脈でプラグマティズムと密接な関係が指摘されるのはむしろ「デフレ主義」の方である)。しかし、この事実はむしろ、両者をつなぎ合わせることで新たな知見を生産していこうとする本研究構想の独自性と生産性を示すものと言える。

### 3. 研究の方法

本研究課題が目指したのは《真理の多元論のための形而上学的描像》の明確化である。その作業において留意されるべきは、対応説的真理論と結びつけられた既存の形而上学的描像との差異を明確にすることである。この点について研究代表者は、物理主義的世界観を対照項として設定することが適切だと考えているが、その理由は2つある。一つは、物理主義は対応説と親和的な形而上学としてもっとも典型的なものだから、というものである。典型的な物理主義では、真理について語ると称する《科学的でない言説》——倫理学言説や心的言説など——に対して物理的性質へのスーパーヴィーニエンス関係を要求することにより、複数の言説の一元的な統合が主張される。これは、そうした統合を認めない真理の多元論との明確な対立点であり、物理主義的世界観との対照は《多元論のための形而上学》の特徴を浮き彫りにする上で極めて有効な視座を与える。もう一つの理由は、物理主義に関する豊富な議論蓄積の存在である。これまでの研究により、物理主義的世界観がどのようなものであるかについてはかなりの部分が明確になっており、それと対照することは《多元論のための形而上学》に要求される明確さの水準を引き上げることを要請する。本研究が物理主義的一元論に対置されるべき立場として多元論をとりあげ、それがもたらす形而上学的世界観を明らかにしようとするのであれば、物理主義に見られるのと同水準の明確さを備えた描像にまで仕上げる必要があるのだ。そして、それは、物理主義者が提出する統合への理路のどの部分を阻却するか、そしてその阻却が何をもたらすかを見ていくことで、かなりの部分が達成されるはずである。

#### 4. 研究成果

研究の初期段階では、「世界は物理的なものだけから成り立っている」とする物理主義的一元論の立場についての批判的検討を行った。そこでは、科学的实在論論争についてのここ数年の研究成果を踏まえた上で、《形而上学的实在タイプの物理主義》という立場について、従来に比してより明確な整理と規定を与えるとともに、この立場を擁護するための論証が哲学的自然主義という議論文脈において受ける制約について明確化した。加えて、従来の物理主義擁護論証がこの立場の正当化に使えないという主張を展開した。また、ドイツのボン大学にて開催された国際カンファレンス nature, technology, metaphysics にて、"Against Metaphysically Realistic Physicalism"と題した講演を行った。そこでは、哲学的自然主義と物理主義の関係性についての解説を土台として、科学的实在論に定位した形での形而上学的实在論的な物理主義の正当化が機能不全に陥ることについての論証を展開した。また、発表内容に関して国・地域・専門分野を異にする複数の研究者たちと緊密なディスカッションを行った。その成果は2025年度に出版予定の論集に掲載予定である。

研究の中盤以降においては、「真理を実現する性質は言説領域ごとに異なりうる」とする真理の多元論の内実をより実態に即して明らかにする作業の一環として、様々な言説領域において《対応》以外のどのような真理観が運用されているかを検討した。具体的には、社会科学の諸分野（歴史学および文化人類学を含む）において展開されている方法論的論争をサーベイしつつ、量的研究および質的研究の間での真理観の相違、および、対応説的真理観に対して距離をとる傾向の強い質的研究内部での真理観の相違について、整理分析を進めた。これらの成果は、人文社会科学の研究者が集う国内研究会において「『社会科学の研究・デザイン』(DSI)概要紹介」、「DSIに対するリアクションの論点整理」、「秋山晋吾『姦通裁判』(2018)を社会科学方法論の観点から検討する」、「KKVに対する既存の反論の整理」、「KKV論争の後で、質的研究者たちは何を考えるべきか」というタイトルのもとで報告され、さらに The Asian Network for the Philosophy of the Social Sciences (ANPOSS), the European Network for the Philosophy of the Social Sciences (ENPOSS), and the Philosophy of Social Science Roundtable 2021 Joint Conference において“A Mechanism for Justification of General Claims in History and the Challenges It Might Involve”というタイトルのもとで報告された。なお、これらは井頭昌彦（編著）『質的研究アプローチの再検討：人文・社会科学からEBPsまで』（勁草書房2023）として出版された（筆者は4章100ページ程度を執筆）。

上掲『質的研究アプローチの再検討』は出版から1年足らずの間に6刷に達したほか、様々な分野の研究者たちによって読書会が多数行われるなど、広範な読者を得ることができた。そうしたリアクションに応答するなかで、関東社会学会において招待講演「質的研究手法のための理論武装の仕方を社会科学方法論争から学ぶ」を行い、また関連諸分野での同書籍に対する複数の検討会に招聘されて議論を行った。なお、関東社会学会での講演は、部分的な改変を経て「質的研究におけるHARKing問題？」と題した招待論文として当該学会機関誌に掲載される予定である。また、本研究課題からのさらなる成果報告として、京都大学文学部において「プラグマティズムと側面図(side-view)の描き方——Sellars, Price, Carnap, Brandom (Rorty)——」と題した研究発表を行った。当該発表においては、まず John McDowell の哲学構想が抱えるジレンマを指摘しその解消方法を提案する Huw Price の議論を叩き台にしつつ、《我々の概念体系全体を外側から眺めるような形而上学的視点》を回避しつつ諸言説に対する側面図を描くという「非形而上学的側面図構想」を打ち出した。つぎに、この構想に連なる先行哲学者として W. Sellars, Price, R. Carnap をとりあげてその側面図構想にどのような異同があるかを整理しつつ、どのような形態の側面図構想がもっとも有効であるかを分析し、そのもとで処理可能な哲学的課題のリストアップを行なった。最後に、現代プラグマティズムの中心人物である R. Brandom が展開する諸議論をこの側面図構想のもとで再整理し、そのうえで Brandom やその後継者が想定するよりもさらに形而上学的要素を絞り込んだ構図でそれらを再記述可能であると主張した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井頭昌彦	4. 巻 -
2. 論文標題 質的研究におけるHARKing問題？	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 プラグマティズム と側面図(side-view)の描き方 Sellars、Price、Carnap、Brandom (Rorty)
3. 学会等名 第4回推論主義研究会(科研費「現代推論主義におけるヘーゲル哲学の貢献とその応用の可能性について」研究会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 質的研究手法のための理論 武装の仕方を社会科学方法論争から学ぶ
3. 学会等名 関東社会学会(テーマ部会B「新しい社会調査法と社会調査教育」)(招待講演)
4. 発表年 2023年～2024年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 KKV 論争の後で質的研究者は何を考えるべきか
3. 学会等名 東京大学社会科学研究所「社会科学のメソドロジー」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 KKV に対する既存の反論の整理
3. 学会等名 一橋大学社会学研究科先端課題研究19
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masahiko Igashira
2. 発表標題 A Mechanism for Justification of General Claims in History and the Challenges It Might Involve
3. 学会等名 ANPOSS, ENPOSS, and the Philosophy of Social Science Roundtable 2021 Joint Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 「秋山晋吾『姦通裁判』(2018)を社会科学方法論の観点から検討する」
3. 学会等名 一橋大学社会学研究科先端課題研究19
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 「DSIに対するリアクションの論点整理」
3. 学会等名 一橋大学社会学研究科先端課題研究19
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 「『社会科学のResearch・デザイン』(DSI)概要紹介」
3. 学会等名 一橋大学社会学研究科先端課題研究19
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 形而上学的实在論タイプの物理主義を論難する
3. 学会等名 一橋哲学社会思想セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masahiko Igashira
2. 発表標題 Against Metaphysically Realistic Physicalism
3. 学会等名 nature, technology, metaphysics (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井頭昌彦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 400
3. 書名 質的研究アプローチの再検討 人文・社会科学からEBPsまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

質的研究アプローチの再検討  
<https://www.soc.hit-u.ac.jp/~methodology/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------